伊那弥生ケ丘高等学校

校長通信　～日輪もまた 今燃えて～

第 24 号

令和6年4月 26 日

４月 25 日（木）、２年生の探究の授業である「アカデミック・チャレンジ」（学術的な研究に挑戦する）を昨年度に引き続き実施しました。高大連携の授業として、信州大学、長野県立大学、県看護大学、長野大学、松本大学の研究者が来校してくださり講義をし、生徒に問いを与えてくださいました。２つの教室をのぞいてみましたので紹介します。

長野県立大学の馬場智一先生は、20 世紀のフランス・ドイツの哲学が専門です。先生の自己紹介の中で、「問い」につながるご自分の経験を話してくださいました。小学校の通学途中、友だちと別れて一人で歩いている時に物思いにふけっていたこと、高校３年の「倫理」の授業で「哲学」という学問を初めて知ったこと、大学では英語の教員を目指していたが独学で哲学を学び、大学院では哲学を専攻し、他者論で知られる哲学者について、留学先のフランスでも研究したこと、帰国して「哲学対話」という活動に出会ったことなど興味深く聞くことができました。

馬場先生の提示された問いは、「“話し合い”はどうあるべきか」でした。「話し合い」の目的や方法の違いから、各自で話し合いの具体を選び、答えを追求するための学問研究にチャレンジしていきます。

県看護大学の髙橋百合子先生は、小児看護学が専門です。医療系のテーマはここだけであったので、受講していた生徒は医療・看護系を志望している生徒のようでした。

課題として提示された問いは、「子どもが自分らしく健やかに生きるためにあなたができることは何ですか？」でした。

講義の中での最初の問いは「あなたにとって子どもはどんな存在ですか？」でした。グループワークから生徒の回答は、「かわいい」「守るべき存在」「癒し」「元気」「感情表現が豊か」などでした。次の問いは「自分らしく健やかに生きるとはどういうこと？」でした。生徒にとっては難しい課題であったのか、簡単に言葉にすることはできない様子がうかがえました。

２つの教室しか見られませんでしたが、この他にも認知バイアス、感性工学、持続可能性、地方再生、小学校算数教育などの探究キーワードから生徒が興味・関心のある授業を選んで受講していました。